

季通わぎはひにあはむとする事（宇治拾遺物語卷二・第二七）

昔、駿河前司（ぜんじ）橘季通（たちばなのすえみち）といふ者ありき。それが若かりける時、さるべき所なりける女房を忍びて行き通ひける程に、そのありける侍ども、「生六位の家人にてあらぬが、宵暁にこの殿へ出で入る事わびし。これたて籠めて勘ぜん」といふ事を集りて言ひ合せけり。かかる事をも知らで、例の事なれば、小舎人童一人具して局に入りぬ。童をば「暁迎えに来よ」とて返しやりつ。この打たんとするをのこども窺ひまもりければ、「例の虫来たつて局に入りぬるは」と告げまはして、かなたこなたの門どもをさしまはして、鍵取り置きて、侍ども引杖して、築地の崩れなどのある所に立ち塞りてまもりけるを、その局の女の童けしきどりて、主の女に「かかる事の候ふはいかなる事にか候ふらん」と告げければ、主の女も聞き驚き、二人臥したりけるが起きて、季通も装束してゐたり。女、上にのぼりて尋ねれば「侍どもの心合せてするとはいひながら、注主の男も空しらずしておはする事」と聞き得て、すべきやうなくて局に帰りて泣きゐたり。

季通「いみじきわざかな。恥を見てんず」と思へども、すべきやうなし。女の童を出して、出でて往ぬべき少しの隙やあると見せけれども、「さやうの隙ある所には、四五人づつ、くくりをあげ、稜（そば）を狭みて、太刀をはき、杖を脇挟みつつ、みな立てりければ、出づべきやうもなし」といひけり。

この駿河前司はいみじう力ぞ強かりける。「いかがせん。明けぬとも、この局に籠りゐてこそは、引き出でだしに入り来ん者と取り合ひて死なめ。さりとも、夜明けて後、吾ぞ人ぞと知り名前が誰と知られるなん後には、ともかくもえせじ。従者ども呼びにやりてこそ出でても行かめ」と思ひたりけり。「暁この童の来て、心も得ず門叩きなどして、我が小舎人童と心得られて、捕らえ縛られやせんずらん」と、それぞ不便に覚えければ、女の童を出して、もしや聞きつくと窺ひけるをも、侍どもははしたなくいひければ、泣きつつ帰りて、屈まりゐたり。

*この女房が仕えている娘の父で事実上の雇主と思われる

かかる程に、暁方になりぬらんと思ふ程に、この童いかにしてか入りけん、入り来る音するを、侍「誰そ、その童は」と、けしきどりて問へば、あしくいらへなんと季通が思ひるたる程に、「御読経の僧の童子に侍り」と名のる。さ名のられて、「とく過ぎよ」といふ。「かしこくいらへつる者かな、寄り来て、例呼ぶ女の童の名や呼ばんずらん」とまたそれを思ひるたる程に、寄りも来で過ぎて往ぬ。「この童も心得てけり。うるせきやつぞかし。さ心得てば、さりともたばかる事あらんずらん」と、童の心を知りたれば頼もしく思ひたる程に、大路に女声して、「引はぎありて人殺すや」とをめく。それを聞きて、この立てる侍ども、「あれからめよや。けしうはあらじ」といひて、みな走りかかりて、門をもえあけあえず、崩れより走り出でて、「何方へ往ぬるぞ」、「こなた」、「かなた」と尋ね騒ぐ程に、「この童の謀る事よ」と思ひければ走り出でて見るに、門をばさしたれば、門をば疑はず、崩れのもとにかた侍のへはとまりて、とかくいふ程に、門のもとに走り寄りて錠をねぢて引き抜きて、あくるままに走り退きて、築地走り過ぐる程にぞこの童は走りあひたる。

具して三町ばかり走りのびて、例のやうにのどかに歩みて、「いかにしたりつる事ぞ」といひければ、「門どもの例ならずさされたるに合せて崩れに侍どもの立ち塞りて、きびしげに尋ね問ひ候ひつれば、そこにては、『御読経の僧の童子』と名乗り侍りつれば、出で侍りつるを、それよりまかり帰つて、とかくやせましと思ひ給へつれども、参りたりと知られ奉らでは悪しかりぬべく覚え侍りつれば、声を聞かれ奉り帰り出でて、この隣なる女童のくそまりゐて侍るを、しや頭取りてうち伏せて衣剥ぎ侍りつれば、をめき候ひつる声につきて人々ででまうで来つれば、今はさりとも出でさせ給ひぬらんと思ひて、こなたさまに参りあひつるなり」とぞいひける。童子なれども、かしこくうるせき者はかかる事をぞしける。